

新刊紹介

現代美學思潮

渡邊吉治氏著
第一書房刊行

美學と云ふ名にふさはしき學的體系は他の學問に比して最近の所生にかゝるは云へ、美の感覺とその批評的意識は、他の價值と對等的、或は寧ろ自ら根源的位置をすら占めてゐたことも考へられやう。只その科學的反省のみがそれに伴はずして殘されてゐた云へやう。即着物よりも體の方が成長しすぎた孤兒の淋しさな美は常に、そして今も尙感じてゐる。そしてその原因の一つは、美學者のもつ運命による云へやう。即それは、美學者はベダントに陥るか、テイレッタントに陥るか、哲學者であるか藝術家であるかの二つの危険に曝されてゐる。藝術家であると共に哲學者であることはいかに困難であることかを私達ははつきり美學史の上に見る。美學の構成の遲滯と不振の責は人間の存在的構造がその一半を擔ふべきかとも思はれる。

この困難にもかゝらず現今の、殊に日本の藝術批評界は實に眞畫の十字街の如き飽饑さを示してゐる。しかしそれはむしろ私達をして、いつか塵埃多き硝石の夜をまつ淋しさをさそげしむるものがある。今、われ／＼に必要なことは、それがいかに哲學者でありすぎるか、いかにそれが藝術家でありすぎるかを見窮めつゝ、過去の美學を省みること共に、又自らの足下に氣を付ける事

である。この時に渡邊吉治氏の現代美學思潮を得たことは、美學の一つの喜びであると共に、氏が先達故人となられし事があはせて悲しまるゝ次第である。著書は十九世紀後半、寧ろ一八七六年以後の半世紀の美學を廣く互つてあますところなく、よき意味で普及的にこれを序述されてゐる。四六六頁の中に四二人の美學者を混亂に導くことなく親しく饜飴せしめ得ることは著者の外に俟たるべくもない。したがつて、この書より受くる人々の利益は、その各々の内容より抽出さるゝ知識のみならず、その全體或は關係の展望の上に、一種の交響を味ふを得るの特典であらう。云はゞ美學そのもの、閱するテンポをその中に開出づる點に特徴を求むることが出来やう。現今に課せられたる大小の美學問題の鍵鑰をこの中に求むるは餘りに多きものをこの書に求むると云へやう。それは故著者が約束して、悲しくも未だ業半ばなりし「現代美學の諸題」に俟つべきであると思ふ。(定價參圓、中井紹介)

景報

心理學讀書會

去る十月二十四日金曜午後三時半より心理學教室にて左の發表あり。

Tellevé の「民族と言語」

木森 重樹君

十一月七日金曜午後三時半より同心理學教室に於て左の發表